非浸潤性乳がんに対する治療アルゴリズム

非浸潤性乳がんは本来リンパ節や遠隔臓器への転移を起こさない局所の病変である。従って非浸潤性乳がんの治療は手術、放射線治療などの局所療法が主体となる。非浸潤性乳がんも浸潤性乳がん同様に切除断端が陰性であれば、放射線治療を追加することで乳房温存も可能である。

非浸潤性乳がんの一部に浸潤性乳がんが認められることがしばしばあるため、術前の画像診断や針生検などで非浸潤性乳がんの診断を正確に確定することは困難なことがある。癌の広がりはマンモグラフィー、超音波、ＭＲＩなどにより十分に精査し、的確に病変を把握することで乳房温存の機会は増加する。

非浸潤性乳がんが疑われる場合のセンチネルリンパ節生検（ＳＮＢ）の適応は状況によって異なる。腫瘍進展範囲が広く、微小浸潤巣の存在の可能性が高いと思われる場合、組織学的な悪性度が高いと思われるような場合にはより積極的にＳＮＢを考慮することになる。ただし、最終的に非浸潤性乳がんであった場合、ＳＮＢは過剰な治療になる可能性がある。